

社会運動における離脱の意味

——脱退、燃え尽き、中断をもたらす運動参加者の人間関係認識——

富永 京子

本研究は、運動参加者がいかなる理由から、また、どのようにして社会運動から離脱するのかの二点を明らかにする。これまでの社会運動論は、社会運動への参加・不参加、また運動の継続・発展という点を主に問う一方で、運動からの離脱については論じてこなかった。しかし社会運動からの離脱について議論することは、社会運動の参加・持続・発展に対する逆機能的な側面を明らかにする点で、社会運動論の問いに貢献し得る。本研究は運動離脱の要因を多角的に捉え、また離脱の様態として「脱退」「燃え尽き」「中断」の三つの類型を想定し、インタビュー調査に基づく事例分析を行う。分析の結果、運動参加者は時間や体力といった資源の不足や、運動参加による精神的・身体的ストレスに加え、身近な人々との人間関係の捉え直しなどの理由から、運動への参加そのものを問い直すことが判明した。

1 はじめに

社会運動論は、社会運動の発生・持続・発展に関心を寄せてきたと言われる（Klandermans 1995）。社会運動論に属する多くの研究は、「活動家」「運動家」と呼ばれる人々がなぜ運動に参加し、どのようにして運動と継続的に関わっていくのかを問うている。しかし同時に、人々は社会運動から身を引き、それまで所属していた市民団体を辞め、他の活動家との交流を絶つこともある。社会運動論は「なぜ運動に参加するのか」という問題や「どのように運動を継続するのか」という問題を問う一方で、「社会運動参加者がなぜ運動を止め」「どのように運動から離れていくのか」といった問いには関心を寄せてこなかった。

だからといって、離脱という事態が運動研究において重要でないというわけでは決してない。人々が社会運動から離脱するという事態は、彼らが支えてきた社会運動の発展や持続を

妨げることに繋がるのだから、社会運動論の伝統的な問いである「発生・持続・発展」と離脱の間には密接な関連があると言えるだろう。

また社会運動からの離脱は、実践的な立場からも注目されている。運動団体によるドキュメントは、人々が時間や金銭といった資源の不足によって、また警察による嫌がらせや運動組織内でのハラスメントをきっかけに社会運動を止めることを指摘しており、また場合によっては、離脱後もハラスメントや嫌がらせに基づくストレスに悩まされ、日常生活への復帰が困難になることもあると主張する（Activist Trauma Support 2005）。運動からの離脱は、離脱する人々にとっても問題だが、警察や運動組織といった、離脱者をとりまくアクターが抱える問題をも同時に浮上させるのだ。上述のような点を踏まえて、本研究は、離脱を取り上げることによって、先行研究において見落とされてきた、運動への参加や継続を問う際に重要となる新たな要素を明らかにすることを目的とする。

人々は、いかなる理由から、またどのようにして社会運動から離脱するのか。本稿はこの二つの問いに答えることにより、今まで社会運動論が観察対象としてこなかった離脱の実態に迫るとともに、参加・継続を問う上で見落とされてきた要素を発見しようと試みる探索型の研究である。

2 先行研究・分析視角・分析方法

本稿は、社会運動からの離脱とはどのようなものであるかを問う研究であり、離脱の厳密な定義を行うことを目的とはしない。だが、ここではひとまず離脱を「人々が、それまで行っていた社会運動を止め、所属していた社会運動団体（NPO、NGO、市民団体）を離れる」こととしておこう。

本節ではまず、社会運動論の先行研究を検討する。その上で、社会運動論において詳細に検討されているとは言い難かった課題を浮上させ、本稿の問いがいかにしてその課題に答え得るかを明らかにする。

また、分析視角を提示するために、社会心理学と組織論による、社会運動からの離脱に関連する研究の知見を確認する。

2-1 社会運動論の先行研究——理論的精緻化と自明視される「合理的な行為者」像

社会運動から離脱するという事は、人々が運動に参加し、続けることが不可能であるという状態だ。その点で社会運動からの離脱は、社会運動への「不参加」と多くの点で共通していると考えられるだろう。社会運動論の中でも、運動の参加と不参加の関係を照準を当ててきた分野としては「資源動員論」がある。

資源動員論は McCarthy and Zald によって提

唱された議論であり、もともと組織現象としての社会運動を中心に扱っていたが（McCarthy and Zald 1977=1989）、他の論者は、ネットワークや過去の運動経験、また金銭や時間といった資源こそが人々の運動参加を促し、運動を継続させる要因だと主張した（Oberschall 1973 など）。さらに、資源動員論はその発展につれ、社会運動への参加を説明するにあたり、人々の感情や意識といった認知的要因を説明に用いる。例えば資源動員論を引き継いで発展した「動員構造論」もその一つである。動員構造論の論者らは、資源動員論とは異なり、過去の運動経験や人的ネットワーク、金銭といった資源によって運動参加を説明するのではなく、社会運動への参加にあたっては、成員間の交流とそれによって感情を共有することが不可欠だとしている（McAdam, McCarthy and Zald 1997）。この特性は、同じく資源動員論の発展形態の一つである「政治過程論」でも同様に見られる。政治過程論の中で McAdam は、組織のリーダーや動員構造といった運動団体の内部要因と、政治的機会という外部要因の融合により、人々は初めて社会運動によって社会を変革しようと考えようになり（「認知的解放」の発生）、そこで初めて運動参加が生じるのだと主張している（McAdam 1982）。政治過程論以後、資源動員論は外部環境に注目しながら運動のマクロ動員を分析する政治的機会構造論、「問題の解釈」（フレーム）に注目して社会運動への参加を議論するフレーム分析へと引き継がれた。

資源動員論は、もともとは Olson や Hirschman によって展開されてきた「合理的行為者論（合理的選択モデル）」に基づいている。公共財を得るための活動である社会運動は、その運動によって得られる財が「公共財」であるために、運動に参加しない者もその利益

を享受可能であるという「フリーライダー」問題が生じる。行為者が合理的であるという前提に基づくことによって、Olson や Hirschman が答えなければならなかったのは、人々がなぜ運動に参加するのか、ではなく、人々はなぜ社会運動から離脱しないのか、という問いだったのだ。Olson は、社会運動への不参加を防ぐ条件として「集団が小規模であること」「運動参加者のみに提供される財があること（選択的誘因）」を挙げており、こうした条件なしでは集合行為そのものが発生しないと論じた（Olson 1965=1983）。さらに Hirschman は、ある財に不満を持つ人々が選択し得る行動として「離脱」（代替財への切り替え）と「発言」（財への異義申し立てと改良のための運動）があることを指摘する。発言は離脱との比較のもとに選ばれる行為であるが、離脱に比べ高いリスクを伴うため、普通は選択されない（Hirschman 1970）。

その後の社会運動研究において、運動参加者が合理的行為者であることは自明視され、問題化されなくなっていく。一方でこうした合理的行為者論を引き続き議論しているのが、数理的アプローチに依拠した研究である（佐藤 1995, 木村 1994 など）。こうした数理的アプローチによる研究は、基本的には行為者が皆一様に同じ背景のもとで合理的な選択をし、その結果、ある行動を選択すると想定している。しかし、何が合理的であるのかは、彼らが置かれた環境や文化によって大きく異なるのではないか。人々は合理的選択に基づいて、社会運動に参加するかしないか、また、運動を継続するかしないかを決定する。ただ、その合理的選択の実態は、彼らの職業や時間の使い方、価値観や人間関係のあり方によって、大きく異なるのではないだろうか。こうした点を、社会運動論および

合理的行為者論は必ずしも十分に明らかにしてこなかった。

本研究は、社会運動論の先行研究に則って、社会運動に参加する人と同様に、運動から離脱する人々もまた合理的な行為者であると仮定する。人々はそれぞれ異なる環境に置かれており、それぞれ異なる価値観に基づいて合理的な選択をし、その結果、運動から離脱することがある。彼らの合理的選択の末にある「離脱」の背景を分析の視野に入れることによって、社会運動論がこれまで想定してきた「合理性」が一樣でなく、個人の置かれた環境や文化に基づくグラデーションがあることを示す。これにより、社会運動論の共通関心であった、参加・継続をめぐる合理性についての議論にも貢献したい。

2-2 分析視角——離脱に着目した先行研究

社会運動からの離脱は、社会運動論では研究対象とされてこなかったものの、事柄として全く論じられてこなかったわけではない。先行研究の対象領域を社会心理学や組織論へと広げると、そのことが分かる。本節では、社会心理学における「政治的社会化」に関する研究（2-2-1）と、組織論における「離脱」に関する研究を概説する（2-2-2）。その上で、本稿の分析視角を明らかにする（2-2-3）。

2-2-1 社会心理学的アプローチ——人間関係に対する考え方の変化

社会運動からの離脱を取り扱った主な研究として、社会心理学の立場からの研究がある。社会心理学では、人々の「一次的政治的社会化」「二次的政治的社会化」に関する研究を行ってきた。これは、一次的社会化集団（家庭など）や、二次的社会化集団（学校や職場など）にお

ける教育や相互行為が人々の政治意識にどのような影響を及ぼすかを問う研究である。社会心理学による離脱研究は、人々がどのような生育環境から社会運動に参加するのか（一次的政治的社会化）、また社会運動への参加が人々の政治意識をどのように変容させるか（二次的政治的社会化）を問うものである。本稿の問いである「人々はなぜ、どのように社会運動から離脱するのか」を考えるのであれば、とりわけ後者の問題意識に即した研究を検討する必要があるだろう。

ここで注目するのは、とりわけ60年代・70年代の青年による社会運動を事例としながら人々の運動からの離脱を論じた研究である。では、こうした研究は、人々はどういった事情によって社会運動から離脱すると主張しているのか。第一に、政治の変革に対する情熱が失われた場合である。この場合、それまで政治変革に関心を持っていた運動参加者は、その関心を自らの生活へと移すため、運動に参加しなくなる（Demerath, Marwell and Aiken 1971: 180）。第二に、キャリアを変更した場合である。進学や結婚に際して、人々が運動を止めることは少なくない。Demerathらは、特に女性がこうした形での離脱を選択しやすいと主張している（Demerath, Marwell and Aiken 1971: 180-181）。キャリアの変更による離脱は、勤めている職場や通っている大学、住んでいる地域の性格にも依存する。McAdamは、特にフルタイムの仕事に就いている人々や、活動家が少数しかいない地域に住む人々は、運動から離脱することが多いと指摘している（McAdam 1988: 161）。第三に、運動団体の中で他の参加者とコミュニケーションをとることが難しくなった場合、また運動に参加する中で社会からの孤立感を抱く場合である（Keniston 1968=1973:

205）。

社会心理学の立場から離脱を論じた研究の多くが明らかにしていることは、社会運動を経験することで、人々は自らの人間関係に対する把握の仕方を変える、という点である。例えば、活動家が少数しかいない地域の人々は、ある意味で自分が「孤立した」というように自らの人間関係を把握し、そのために運動を止めている。キャリアを変化させた人々もまた、これまで一緒に運動してきた人々との人間関係が変更し、協調できなくなったから運動を止める。人間関係に対する認識の仕方は、運動を続けるうちに変わっていく。このような変化は、人々が社会運動を止める際にも大きな影響を与える。

本研究はこうした社会心理学の立場からの離脱研究の知見を踏まえた上で、社会運動から離脱した人々と、その周囲にいる人々との人間関係を、離脱した人自身がどう感じているかに注目する。また、運動を続けていくうちに、人々は人間関係に対する認識をどう変えるのかに着目し、分析を進める。

2-2-2 組織論的アプローチ——脱退、燃え尽き、中断

社会心理学による離脱研究とは異なる視角を用いて集団・組織からの離脱を分析してきた研究として、組織論がある。組織論は営利組織研究に主眼をおきながら、組織からの離脱には「脱退」と「燃え尽き」、さらに「中断」という形態があることを論じてきた。これら三つの類型に関して、組織論による離脱研究は、個人キャリアをいかに発達させるかという観点から研究を行う。

第一に、人々が組織に望む要素と、組織から与えられる要素とのあいだにギャップがある時、そのギャップは職務内容に対する不満を生

じさせ、離職や転職といった「脱退」を招くと考えられる (Rodgers 2010)。脱退とは、人々が職務を続けようとする意欲を持っておらず、自発的に組織から離脱することとして捉えられるだろう。

これに対して、職務に満足しておりやりがいを感じていても組織から離脱する場合がある。それが第二の類型である「燃え尽き」である。先行研究によれば、燃え尽きは対人サービスや対人援助職といった感情労働を伴う職業に多く見られる (Hochschild 1983, Marlash and Jackson 1981)。対人サービス職や対人援助職といった「感情労働」に参加する人々は、「脱人格化」「情緒的消耗感」「個人的達成感の減退」を感じ、段々と職業労働への参加が不可能になり、「燃え尽き」とされる (Marlash and Jackson 1981 など)。単なる職務ストレスと異なるのは、それが強い感情的・身体的な消耗を伴っていないながらも、あくまで職務への意欲を失っていない点にあるだろう (久保 2004)。社会運動組織においてもこうした状態が度々見られる。開発 NGO の構成員を綿密に調査した Rodgers の研究は、運動によって支援される人々や同僚との関係、また労働時間や職場環境といった労働条件が著しく悪いことから、社会運動においても、職務に燃え尽きる人々が存在することを明らかにした (Rodgers 2010)。

また、「脱退」や「燃え尽き」のように永続的ではないが、第三の類型として、一時的に組織から離脱するという「中断」に関する研究も多く見られる。休職によるキャリアの中断は、ワークライフバランス (佐藤・武石 2010) が重視される昨今、特に研究が進められている領域である。育児や介護といった、個人の家庭環境を要因とする休職がある一方で、メンタルヘルスや気分障害による休職も増加し

ている (佐藤・武石 2010)。職業労働だけでなく、社会運動参加者のあいだにもこうした「一時的な離脱」は存在しており、社会運動の目標が果たされていない状態で運動を中断する人々は決して少なくない (Taylor 1989)。こうした離脱の形態もまた検討する必要があるだろう。

組織論の立場から離脱を論じた先行研究は、離脱という事態が多様であることを示唆している。離脱は、組織とその労務内容に対する不適応によって自発的に選択される「脱退」、また職務への意欲があるにもかかわらず精神的・肉体的な消耗を抱えることにより半ば非自発的に生じる「燃え尽き」、この両者を含みつつも、永続的な離脱を意図しない「中断」へと分類される。本研究は、組織論の枠組みに依拠しつつ、さらにその適用範囲を社会運動集団・組織といった非営利組織へと拡大する。

2-2-3 分析視角

本研究はここまで、三つの分野における、社会運動からの離脱に関する先行研究を検討してきた。第一に、社会運動論の離脱研究は、運動参加者が合理的な行為者という前提の上で議論してきた。その一方で、個々の行為者が異なる背景のもとで合理的選択をすること、すなわち合理的選択の内実は行為者によって異なるということ considering できなかった。本研究は、それぞれの行為者が異なる背景のもとで、合理的な選択に基づいて運動から離脱したとみなし、分析を行う。こうした分析により、合理性と呼ばれるものの多様性を示すことによって、社会運動論へと貢献する。

第二に、社会心理学の離脱研究は、本研究に対して重要な視座を提供する。それは、運動参加者が、運動への参加を経て、とりわけ人間関係に対する考え方を変化させることである。さ

らに、人々の合理的選択は、こうした人間関係に対する認識の変化に基づいていることが予想される。

第三に、組織論の離脱研究は、離脱の類型に関する視座を与えてくれる。それは意欲を失った人々が自発的に運動を止める「脱退」、運動に参加したいという意欲は依然として高いものの、精神的なストレスや身体的な消耗を伴う「燃え尽き」、そして復帰を意図して運動を止める「中断」に分けられる。

本研究は、社会運動論に貢献するために、社会心理学と組織論による離脱研究の視座を援用する。その際、問いを解くために離脱を「脱退」「燃え尽き」そして「中断」へと分類して分析を行う。また、分析の視点として、人々が関わった社会運動だけでなく、人々をとりまく生活の場である職場や学校といった環境やそれに対する捉え方の変化に注目して分析を行う。

2-3 分析方法

本研究では、社会運動から離脱した人々の聞き取りを行い、詳細に記録した質的なデータセットを作成した。本稿ではそれをもとに可能な限り離脱の実態に肉迫した解釈と分析を試みたい。聞き取りの対象としたのは、社会運動を止めたとみずから定義する人々である。また、それに加えて社会運動の離脱者に対する救援活動に関わった人々にも、予備的に聞き取りをした。救援活動とは、運動に参加して逮捕や解雇といった社会的な制裁を受けた人々、その後の社会復帰が困難な人々へのアドバイスや、運動を行う過程で激しい身体的負傷や精神的なストレスを負った人々に対するケアといった活動である。表1に記載しているC氏とN氏、G氏とH氏が離脱者の救済活動への参加者だ。ちなみにこのうちC氏とG氏は、自身も社会運

動からの離脱を経験している。

聞き取り調査は、それまで関わっていた社会運動でどのような問題を取り上げていたか、なぜ運動を止めたのか、離脱前後でライフスタイルやキャリアはどのように変化したのか、といった質問を中心に行った。前節において述べた通り、関わっている運動それ自体だけでなく、ライフスタイルや他者との関係などもまた、個人が運動を止めることと密接に関連している。本研究では、個人が行う社会運動以外の行動、例えば労働や家庭生活、余暇の過ごし方といった項目に至るまで、多岐に渡っている。

対象者によって述べられた離脱のあり方(「脱退」「燃え尽き」「中断」)を分類するにあたって、第一に復帰・再開を意図して運動を止めた事例を「中断」、第二に離脱の前後において強い身体的・精神的消耗を伴い、運動を継続したいと思いつつも止めてしまった事例を「燃え尽き」、第三に再開や復帰を意図しておらず、また身体的・精神的消耗もそれほど強くなく、運動を継続したいと考えていない場合、その事例を「脱退」とした。対象者の概要は表1に掲げた通りである。合計14人(計30時間)に対してインタビューを実施した。

離脱者の母集団が把握できないため、本研究はスノーボールサンプリングによってインタビュー対象者を抽出している。なお、離脱に関する知見をできる限り偏りの少ない形で論じるために、世代や性別といった属性、また職業や経験した運動といった属性が広範囲になるよう心がけた。国籍は日本が主であるが、参考として他国の運動参加者にも聞き取りを行っている。

本研究は以上のインタビューデータを中断、燃え尽き、脱退といった類型に腑分けし、それぞれの類型にある人々の語りから、彼らがなぜ運動を止めたのか、どのような過程を経て社会

表1 インタビュー対象者

	性別	世代	職業	参加した運動	国籍	離脱の形態	聞き取り日
A	男性	50代	大学教員	課税反対運動	ドイツ	脱退	2012/07/17
B	男性	20代	大学院生	新卒一斉採用制度 反対	日本	脱退	2012/10/16, 2010/5/24
C	女性	60代	運動団体勤務	安保闘争	日本	脱退	2012/10/15
D	女性	30代	整骨医	反グローバリズム	日本	脱退	2010/08/11, 2012/09/14
E	男性	30代	公務員	反グローバリズム	日本	燃え尽き	2010/08/11
F	男性	20代	大学院生	フェミニズム運動	日本	燃え尽き	2012/09/16, 2010/08/17
G	女性	40代	運動団体勤務	フェミニズム	イタリア	燃え尽き	2012/07/27
H	女性	20代	フリーター	フェミニズム	イギリス	(参考聞き取り)	2012/07/27
I	男性	50代	介護福祉士	反グローバリズム・ 三里塚闘争	日本	中断	2010/02/28
J	男性	40代	運動団体常勤	人権・差別	日本	中断	2010/08/10
K	男性	50代	運動団体代表	安保闘争・ 途上国開発	日本	燃え尽き	2012/07/31
L	男性	40代	大学教員	反グローバリズム	アメリカ	脱退	2012/08/02
M	女性	30代	出版社勤務	人権・差別、 フェミニズム	日本	脱退	2010/04/07, 2010/08/01
N	男性	60代	運動団体勤務	全共闘運動	日本	(参考聞き取り)	2012/10/15

運動から離脱したのかを検討する。

3 離脱の三類型——脱退、燃え尽き、中断

3-1 脱退——キャリアの変化と変容する人間関係

まずは社会運動からの脱退を検討してみよう。脱退した人々は自発的に社会運動から離脱しており、その際大きな精神的・身体的ストレスを感じてはいない。

A氏は英国の大学に勤める研究者で、大学院生の頃から同じ地域に住んでいる。学生時代から自治体に対し課税反対運動を行ってきたが、ここ数年「表立って運動はしていない」と話す。彼は現在、社会運動に復帰するつもりがない。運動から脱退した理由について、A氏は大きく二つに分けて語っている。

A: 子供ができたことですね。全然生活が変わってしまう。資源の多くが家族に配分されるようになりますから。例えば時間とか、体力とか……。運動に時間は割けなくなりますよね。(中略)運動自体も変質して、自分のやりたいものとは違うようになってきた。言うなれば草の根の運動というような、(社会の)周辺の立場にいる人々と手を取り合う運動が好きです。私は学者として批判することも運動の一つだと思います。でも、それと、最初からイデオロギーが先行しているような運動は違うと思うんです。¹

特定の運動団体への関与が長年続けば、運動のスタイルや理念の変化は十分に起こり得る。A氏は、かつて所属していた団体が「イデオロギーが先行しているような」理念を掲げていることをよく思っていない。A氏自身「草の根の

運動」が好みだと語り、同じ団体に所属する人々と理念を共有できなくなったと語る。こうした理由による脱退は問題への解釈に関わるものなので、社会運動論で説明できる。ただ、もう一方でA氏は、「子供ができた」ことにより、生活が変わってしまったことを脱退の理由として挙げている。こうした理由をどう解釈すべきだろうか。

次に、B氏の例を取り上げてみたい。現在大学院生であり就職活動中のB氏は、学部生時代に大学生の就職活動や新卒一括採用に対する抗議行動をしていた。その頃は「遊び半分で」「政治や社会は関係なく」運動に参加したものの、大学院に入学し、就職活動をする段階で運動を止めたという。B氏はA氏とは異なり、運動の目標には賛同している。また、一緒に運動していた人々とも連絡を取り続けており、自らの就職活動を経て、就活や新卒一括採用に対する疑問や問題意識はさらに深まっている、と話す。それにもかかわらず、彼は運動から離脱した。その理由を以下のように語る。

B: (運動を) やっても、すごくやってもいいと思うんですけど。やっぱりね、色付くのは怖いですよ。就活する身にとっては。大きい企業って興信所とか使って調べるもんらしいですね。あんまり関わるのは危険だなって思うのは、それもありますよね。知り合いで、Z(政党名)の……その人は経歴だけみたらぴかぴかなんだけど、で100社以上多分受けてるんですけど、一個もひっかかんない。(以前は) あんまり深刻には考えない、もちろん顔は出したくなかったとか、そういうのはあるんですけど…リアルにそれが負い目になるっていうことはあんまり考えてなかった。遊び半分で。²

B氏は、運動体側の事情ではなく、あくまで個人的な都合のため運動を止めている。運動の目的も、他のメンバーとの関係も、所属団体の性格も大きく変化したわけではないが、大学を卒業し「就活生」となったB氏にとって、運動に参加するリスクは以前よりもずっと高いものとなった。彼は就職先や就職活動をする他の学生といった「世間の目」を気にしているからこそ、運動を止めざるを得なかった。

そしてC氏もまた、周囲の人々から自分がどう見られるか、どういう印象を持たれるかについて悩み、運動からの脱退を考えた一人である。

C: 私なんかも子供生まれた時なんか「こんなことやっていいんだろうか」とか思って……子供のことも考えるとやっぱりY(団体名)じゃちょっとねって。なぜかっていうと……例えばうちの子供なんか警察は敵だと思ってるじゃないですか。もうずっと、だって家宅捜索なんか来たりして、警察官と親がわーわーやりあってるのを子供のころ見るから、警察は悪いもんだって思ってるわけよ。(子供が)「学校で言うとな、みんながお前はおかしいって言ってね、クラスで一人で浮いちゃったんだよね」って言うの。私なんかは自分がこういう世界を選んできて、自分の生き方としてこういう生き方を選んできたけど、子供にはやっぱり違うじゃないですか。学校とか地域でやっぱり結構きついだろうなって思う。だから、果たしてこんなんでいいんだろうか、子供に対して、もっと別のことを考えたほうがいいのかなどか思って。³

B氏とC氏の事例は、時間や経済的事情だ

けでなく、社会運動をしていない身近な人々(友人や地域住民、就職活動先の企業)にどう見られるかということも、脱退の理由となり得ることを示している。

上述の事例に見られるように、キャリアが変化することは、社会運動参加者に二つの変化を引き起こす。第一の変化は、時間や資金、体力といった資源に対する考え方の変化である。キャリアが変化すれば、人々はそれまで運動に用いていた資源の使い途を変え、子育てや就職活動、職業生活へと費やすようになる。第二に、活動家はキャリアの変化に際して、改めて「身近な他者からの目」を意識する。新たな生活の場に出ることで初めて、身近な人々が自分をどう思っているか、社会運動に参加することをどう感じているか、といった点で、自分をめぐる人間関係を捉え直していることになるのである。

B氏やC氏は、社会運動に普段から参加しない人々、言わば「運動外」にいる人々が自分をどう思っているか考えた上で、運動を止めた。しかしここでA氏の例に立ち戻って考えてみたい。彼が気にしていたのは、運動外にいる人々というよりも、むしろそれまで一緒に運動していた「運動内」の人々である。A氏は、運動内の人々と理念を共有できず運動を止めた。脱退のタイミングは、基本的には参加者のキャリアの変化とともに訪れるが、彼らが「運動外」の人間関係を気にするか「運動内」の人間関係に目を向けるかによって、脱退の性格も異なってくるものと考えられる。この点に関しては、結論部にて再度考察したい。

3-2 燃え尽き——運動外による脅威、運動内からの排除

燃え尽きの状態にある人々は、運動に参加し

たいという意欲を持ったまま、精神的・身体的に傷ついたために運動を止める。脱退と同様に、そこには運動内外の人間関係が強く関連しているに違いない。では、燃え尽きた人々は何をきっかけとし、身近な人々との関係をどのように捉え、運動を止めるのか。

まずはD氏の事例を見てみよう。

D: 自分はやっぱり経営のこと考えなきゃいけなくて、頭の中がそれで一杯になっちゃって、どうしても時間的にそっち(社会運動)に割く余裕がなくて、でもそっちもやりたいけど……、っていうジレンマがすごくあったんだ。やっぱり、「ちょっと大きいことをやろう」と思っても、怖いじゃん。でやっぱり、トラウマを、植え付けたよね、警察ね、あんにやろうどもね。⁴

D氏は数年前に、ある国際的な閣僚会議が地元で開催された際、それに対抗して大規模な路上デモを企画した。一方で、デモの企画や運営と並行して整骨院を開業したため、時間や体力の余裕といった点で、運動を続けることが難しくなっていた。こうした理由による社会運動からの離脱は、前項で示したA氏の事例と類似していると言える。しかしD氏は、警察に対する恐怖や、再度公共の場に出て運動することへの恐れ、また、趣味をともにしている友人たちから間接的に排除されてしまったことが、運動を止めた要因だと語っている。

なぜ彼女は社会運動に参加することを恐れるのだろうか。また、なぜ運動することにより、友人たちから排除されてしまうのか。この恐怖は、彼女が企画したデモにおいて、彼女の友人が警察に逮捕されてしまったことに端を発している。D氏は、自らも逮捕されるかもしれない

という恐怖や、その友人を通じた他の友人たちとの人間関係が絶たれてしまう危機を強く感じていた。彼女は友人の逮捕をきっかけに、他の友人たちとも一時連絡が取れない状況にまで追い込まれてしまったと語っている。

このような精神的負担は、時として身体にまで影響を及ぼす。E氏もD氏とともにデモに参加しており、その後、D氏とともに友人たちから排除された、と語る。二人は当時の状況を以下のように話している。

E: やっぱ彼ら（警察）も多分分かっててやってるのは、人間関係を壊しにかかってるよね。繋がりやを壊しにかかってる。捕まることによってそういうのが切れることも多々あるから。「ふーん、こういう手なんだ」って。だから不当に（拘留期間を）伸ばすし、嫌がらせ。だって、捕まった人は誰かを逆恨みしたくなるじゃん。

D: (友達が) 逮捕されるところを見るわけですよね。それを見た彼と私の傷ついた具合はやっぱり違いました。やっぱり1年2年はライブの時にお腹痛くなったりとか。後、仲間たちから干されてしまったから、1回バンドとして。離れたほうがいいだろうってバンドの人も言ってくれたので。バンド活動に弊害はあったし、周りからすごいひどく言われてたし。⁵

D氏とE氏の燃え尽きは、逮捕への恐怖や「忙しさ」だけでなく、運動参加者以外の友人たちとの関係にも強く関連している。その意味で彼らの燃え尽きは、就職活動先の人々や子供の同級生といった「運動の外」に配慮して脱退したB氏やC氏にも近い。友人の逮捕、警察による弾圧が一つのきっかけではあったものの、彼ら

はそうした事件からさらに「周りからすごいひどく言われ」て「干され」、「バンド活動に弊害があった」という形で、社会運動の外にいる人々との軋轢を経験する。

では、B氏やC氏に対するA氏の事例のように、運動内の人間関係が「燃え尽き」を引き起こす事例もあるのではないか。今でこそ60年代・70年代の全共闘運動などのように大規模な運動は多くないが、これらの運動で所謂「内ゲバ」を経験したことで、肉体的にも精神的にも傷つき、政治変革への意欲を持っていても、社会運動から離脱せざるを得なかった人々は少なくないだろう。⁶

また、それほどではないにせよ運動体内部で葛藤や対立を経験したのが、2011年3月以降反原発運動に参加していた際、他の参加者との理念的対立、またそれに関連した運動内での差別により社会運動を止めたF氏である。

F: あるパンクスの人がスピーチをしている時、「ここにいる女の子ー」って言って女の子たちに手を挙げさせて「男の子ー」って聞いて男の人にも手を挙げさせて、「男の人も女の子の人もいますが、あ、オカマも来てるかもしれない」って言って、周りの人がどっと笑い出すっていう。もちろんそれだけを聞いたら、彼が言いたかったことは「色んな人がいますよ」ってだけのことなんだけど……でも流れや言葉としては、これまでの社会的な文脈の中では差別的だって。⁷

彼は、3.11以降新しく運動に参入してきた人々の言動が時おり差別的になること、さらにそれを指摘しても、何が差別的なのかを理解してくれないことに落胆し、現在は社会運動に携わっていない、と語る。それまで彼の参加して

いた運動の中では、女性や障害者、性的マイノリティといった人々を差別しないということが当然だったために、彼は新規参入者たちのこうした振る舞いに驚き、また傷ついたので。自身も「性的マイノリティ」であり、自らの立場から問題を発信していた彼にとって、間接的であれ自身の立場を「笑い話」として扱われたことは、単なる理念的な対立というレベルに留まらない落胆と失望を伴うものだった。

運動内での人間関係によって疲弊するのは、F氏のようなマイノリティの人々だけではない。

G氏はフェミニストであり、彼女もまた運動によって燃え尽きた人々の一人である。なぜ燃え尽きたか、という問いに対し、現在ともに運動しているH氏と、以下のように話していた。

G: (燃え尽きに関する団体を作った理由は) 簡単ですよ。私も燃え尽きていたのよ。運動の場がマッチョになっていた。それで燃え尽きたの。警察から嫌がらせをされるのも、男性と女性がいたら、(イギリスでは)絶対に女性のほうが多い。(中略)あとは、運動の中でも……。

H: 男性のほうが、あるカテゴリの人を排除したり、ある価値観を押し付けたりということを無意識にやってる場合がとても多い。場がマッチョになると、運動は限られた人だけのものになってしまう。

G: マイノリティの運動がさらにマイノリティを作って、そのマイノリティは運動から出ていかざるを得ない。そういうことも、とても多かったよね……。⁸

G氏は、自身が燃え尽きたのは「場がマッチョになる(運動の中で女性やマイノリティが差

別される)」ためだと語る。彼女はF氏と異なり、社会における少数派として自らを認識していないが、自分が「女性」として運動内の人間関係から排除されることに強い抵抗を示していた。

燃え尽きは、運動を続ける過程で精神的・身体的に傷つき、それ以上傷つくことを恐れ、政治変革や問題解決への意欲があるにもかかわらず、運動から離脱せざるを得ない事態を指す。一緒に運動に参加している人々によってもたらされる傷と、運動に参加していないが身近な人々によるものに分けられる。D氏やE氏は運動外の人々である「趣味の友達」に排除され、燃え尽きていったが、F氏やG氏の場合、差別的な言動をする「パンクスの人々」や価値観を押し付ける「マッチョな人々」といった、社会運動の内部にいる人々によって傷つけられたと言える。

3-3 中断——運動の仲間とプライベートの友達

最後に、本研究では「中断」を検討する。中断は、脱退や燃え尽きとは違い、その後実際に再び運動することを想定して運動を止める人々を指す類型である。中断を選択する人々はそれほど多くはなく、本稿の対象者でも14人中2人に留まる。

まずI氏は50代の男性であり、成田空港敷設反対闘争(三里塚闘争)や反グローバリズム運動を中心に、幅広い運動に関わってきた。52歳の時、それまで絶え間なく続けてきた運動を「お休み」した、と語った。

I: 運動を止めたのは、僕の個人的な理由。(中略)あの、フルタイムの仕事をしているんです。仕事しつつこの運動もやって、もともと精一杯なものですから。もう50代

ですから。「自分の人生殆どそればかりやってきました」みたいなどころがあるので、良くも悪くも（運動に）慣れすぎているところがある。まだ若くて運動に自分を賭けていくモチベーションとか可能性みたいなものを持っていれば新鮮に思ったかもしれないんですが、もう大体分かるから。大体自分のキャパシティも分かるから。⁹

I氏は仕事が忙しく、社会運動を行うための資源が十分でない。こうした事実だけを見ると、前項で検討したA氏やD氏のような「脱退」「燃え尽き」の類型にいる者たちと同じ状況にあるのではないかと考えられる。しかし、彼は脱退した人々や燃え尽きた人々と異なり、運動の内外を問わず、他者との関係に配慮したり、それによって傷ついたり、といった理由で運動を止めたという様子はみられない。運動を中断した理由は、社会運動に参加しない人々の目を気にしたり、他の参加者に失望したりといったことではなく、あくまで自分が運動に対して「新鮮に思え」ず、また自分の仕事で「精一杯」なためである。

では、彼にとって他者との関係とは、運動を行う上でどのような位置を占めるのか。聞き取りの際、あなたにとって運動とは何か、また運動をする際、身近な人々とのどのように付き合っているか、と質問した時、I氏は以下のような返答をした。

I: 何かするじゃん。例えば会議をするじゃん。(中略) それはその後も続いていっちゃう、終わらん、ずーっと続いていっちゃうから…それは(人との付き合いが続く限り) 続いていってしまうんで「止める！」って思わない限り止めることにはならな

い。(中略) 活動の人とは、境目がある意味ない。つまりその、運動してるって、会社の仕事してるのと違ってさ、プライベートな話なんだけどもさ。だけど自分の人生のコースがそれなわけだから、自分のプライベートだっていえばプライベートでもある、だけどオフィシャルでもあるじゃない。¹⁰

I氏は運動を「お休み」と宣言したその一年後に三里塚闘争へと復帰している。彼は個人的な事情によって運動を止めてしまった。今なお仕事が忙しいにもかかわらず、彼が再び運動へと復帰する原動力となったのは、それまで関わってきた社会運動を通じて構築した他者とのネットワークであった。I氏はさらに、彼にとって運動内外のネットワークが重複しており、運動とその他の生活（職業生活や家庭生活）を「境目があまりない」ものとして捉えている。

もう一人、社会運動を中断した者としてJ氏がいる。彼は地元にある運動団体Xの専従を務めていた。地域の問題だけに取り組むのではなく、反グローバリズム運動のためにメディア・アクティビズム（インターネットやラジオを利用した社会運動）の拠点を設置するなど、幅広く運動を行っていた。だが反グローバリズム運動に参加した後、それまで関わっていた社会運動をぱったりと止めている。J氏もまた、社会運動を一時的に止めた理由を述べる際、運動の内外を問わず、人間関係が原因だとは考えていない。中断した理由を「自分の気持ちの問題」「仕事が忙しかった」としてのみ語る。

J: 自分の気持ちの問題ですよ。行動をしている時は盛り上がったわけでしょ、その後やっぱり「どーん」と来るわけだ。それだけです。(その気持ちは) 回復してないかもしれない

です…してない。でも2年経ってる、いい加減…。(中略)がっかり感と、後はやっぱり、そこでやったことが今に繋がってないっていうのはやっぱりあるような気がする。(中略)…まあ、仕事辞めまし、一応「終わった後に何かやりましょう」って約束して、みんなと別れたわけだから、本当に義理と責任感だけで何か、とりあえず始めます。¹¹

J氏は、社会運動の内と外における人間関係をどのように認識しているのか。彼は、運動団体Xに対しても、そこを通じて知り合った人々にも「愛着がありました」と語る。社会運動を中断する直前、「ここ(運動団体X)だからよかったのであって、(他の団体だったら)きっととっくに活動をやっていなかった」とも話す。またJ氏と一緒に運動に参加していた人々も、「昔からの仲」「友達」¹²と語っており、彼の運動内での人間関係は、社会運動だけでなく、他の行動をともにする親しい関係であることを物語っている。彼は運動を中断した1年後、反グローバリズム運動へと復帰する。

I氏とJ氏は、基本的には二人とも「仕事が忙しい」「体力的に精一杯」といった理由から自発的に運動を止める。この点だけを見れば、その理由はA氏のように脱退した人々と変わらない。しかし、I氏らは脱退した人々のように、運動の外からどう見られるかを気にしていたり、運動内の人間関係に疑問を持っていたりする様子はない。I氏とJ氏にとって、一緒に社会運動をする人々は、余暇をともにする私的な友人でもある。彼らにとって運動内外の人間関係は「境目がない」のである。彼らの場合、運動を止めても私的な人間関係は継続しており、A氏やF氏のように運動内の人々との交流が途切れることはない。だからこそ容易に運動

へと復帰できるものの、逆に言えば完全に離脱することは難しくなると言える。そのことをあらかじめ分かっているからこそ、I氏とJ氏は「中断」を選ばざるを得なかったのではないか。

4 結論——人間関係と離脱

前節では、脱退・燃え尽き・中断という離脱の三類型をめぐる運動参加者の語りを検討した。そこから浮き彫りになってくるのは、彼らが社会運動を止めるにあたって、自分自身の生活を理由とした離脱と、自分以外の人々との関係を理由とした離脱の二つがあるということだ。まず、個人的な理由(キャリアの変化、時間や体力の不足)によって運動から離脱する者がいる。またその一方で、自分自身に原因はないが、運動を止めようとする者もいる。この二つの区別はちょうど、「脱退」もしくは「中断」によって運動から離脱する場合と、「燃え尽き」によって社会運動から離脱する場合の二分類に対応しているようだ。脱退や中断を考えた者は、「仕事が忙しい」「子供ができて生活が変わった」といったことを理由に運動を止めるが、燃え尽きた者たちは、「(運動への参加が)怖い」「運動の場がマッチョになっていた」と、参加した運動や、そこでの人々のふるまいを理由に離脱する。

さらに、これとは別にもう一つ、離脱の様態に関わる重要な軸があることに注意しておこう。それは運動参加者たちが取り結ぶ「人間関係」に対する認識である。資源動員論に代表される議論は、運動への参加・継続にあたり「人的ネットワーク」が重要であると主張した(McAdam 1988)。それと同様に、人々が運動を止める際にも、自らのネットワークにいる人々の存在が重要になってこよう。そしてそれ

は大きく二つに分けられる。ある人々はともに運動をする人々、言わば「運動内」の人間関係に疑問を抱きながら離脱し、またある人々は運動に参加しないが付き合いのある人々、言わば「運動外」の人間関係に配慮して運動を止める。この二つのパターンは、脱退と燃え尽き、どちらの離脱にも見られる。

「趣味の友達」「子供（の友達）」「就職活動先の人」といった運動外の人間関係に配慮する人々は、社会運動に参加することでどう思われるかを気にして、社会運動以外の場で構築した人間関係の断絶を恐れる。社会運動以外の世界でうまくやっていくために運動を止めるのだから、彼らはある意味で「一般社会での生活を優先した」と言える。このうちキャリアの変化をきっかけに、知人・友人との関係が絶たれる可能性がある場合、B氏やC氏のように脱退するというかたちになる。これに対して社会運動への参加が即運動外の人間関係の断絶を伴う場合、D氏やE氏のように燃え尽きるものと考えられる。

そしてこうした事例とは異なり、同じ運動団体に所属していた人や、ともに社会運動を行った人々に疑問を抱いて運動を止める者もある。例えばA氏は、B氏やC氏のように運動の外に対しては緊張を感じることなく、自発的に運動を止めた。彼は、運動内の人々が「草の根の運動」から、より「イデオロギー先行の運動へ」と変化したことを残念に思っていた。またF氏やG氏は、一緒に運動をした人々が「マッチョで」「話が通じない」ことに強いショックを受け、運動を止めた。以上の概要を簡略化して示せば、図1のようになる。カテゴリ①、②にいる人々は脱退し、カテゴリ③、④にいる人々は燃え尽きる。そして脱退と燃え尽き、それぞれの類型の中には、さらに運動内と運動外

の人間関係、どちらを重視するのかという軸がある。また、これらに当てはまらないカテゴリとして、あまり人間関係を苦しめないまま運動を中断した事例であるカテゴリ⑤が見られる。

では、中断した人々（カテゴリ⑤）と離脱した・燃え尽きた人々（カテゴリ①、②、③、④）はどのように異なるのだろうか。中断と離脱・燃え尽きのあいだにある違いは、運動内と運動外の人間関係が重なっており、運動の内外における環境が親和的なものとして認識されているか、それとも運動内と運動外が全く違う世界として認識されているか、という点にあるのではないだろうか。運動内と運動外、どちらの人間関係を意識して運動を止めるか、ということがカテゴリ①、④とカテゴリ②、③を分かつのに対し、カテゴリ⑤とその他は、離脱した人々をとりまく人間関係が、彼らにとってどう認識されているか、という点において大きく異なる。図1に対してもう一つの軸を加えるとすれば、以下のようなものになるだろう。

図1と図2は、同じ図を別の角度から現した三次元のカテゴリ表である。カテゴリ①から⑤は、以下の三つの軸によって位置づけられる。第一の軸は、離脱の原因が参加者個人にあるのか、それとも運動体にあるのかを区分する。第二の軸は、離脱する際、どのような人間関係を意識して離脱するか（運動外の人間関係に配慮するか、運動内の人間関係に疑問を持つか）を区分する。第三の軸は、個々の参加者の中で、運動内・運動外の人間関係はどのように認識されているかを区分する。

ここで第三の軸に関して、さらなる説明を加えたい。カテゴリ⑤に属する人々は、社会運動を一時中断したI氏やJ氏である。彼らの場合は運動の内と外とを問わず、あまり人間関係を苦しめた様子はない。彼らにとっ

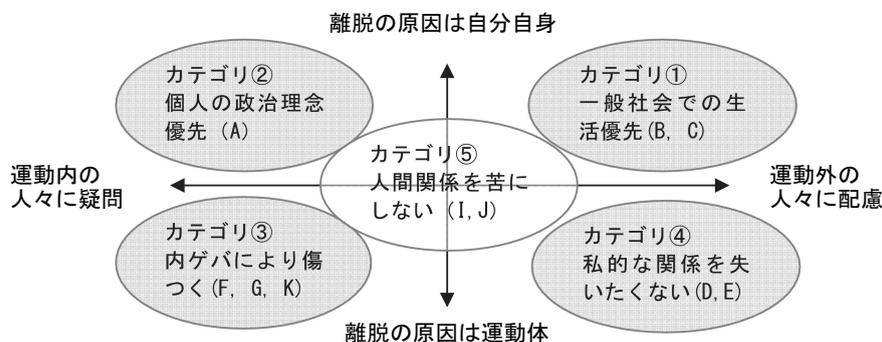


図1 離脱の分類——離脱の際に重視される人間関係

て運動内外の人間関係が同じものとして一体化して捉えられていたことが、その理由として大きく影響しているのではないだろうか。

では、なぜ運動内外の人間関係が一体化して捉えられていると、中断という選択が可能になるのだろうか。彼らは運動を通じて出会った人々と、余暇も、また労働時間もともに過ごす。運動外の人を目を気にして社会運動をする必要もなく、運動外と運動内の人間関係を比較して、どちらかに疑問を持つということもない。社会運動を止めても私生活を通じて人間関係は継続しており、運動を再開する「受け皿」があることが分かっているからこそ、彼らは中断を選択できるのではないか。また一方で、中断を選択した意図がどういったものであれ、彼らは周囲から運動に復帰することを期待される可能

性が高い。そのために、完全な離脱が不可能であるとも考えられるだろう。

さて最後に、本稿の問いを今一度確認してみよう。それは、人々はいかなる理由により運動を止め、また、どのようにして社会運動から離脱するのか、ということであった。この問いに対し、前節では離脱の様態として「脱退」「燃え尽き」「中断」といった類型に沿って人々の語りを検討した。その上で本節では、社会運動の参加・継続を論じる際に見落とされがちな人間関係をめぐる問題について、それなりに深い考究を行うことができた。

合理的な選択の結果、人々は社会運動に参加するというのが、資源動員論以降の社会運動論の主張であり前提だった。その一方で、人々がどのような背景のもとで、またどういった要素

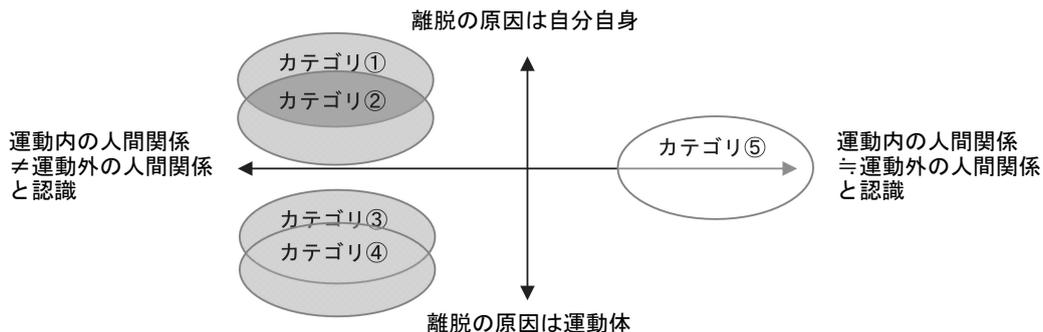


図2 離脱の分類——人間関係をどのように認識しているか

を考慮して合理的な選択をしているのか、ということ、社会運動論において殆ど検討されてこなかった。これに対して本研究は、人々が離脱を選択する際、とりわけ自らの人間関係の把握の仕方を変化させることを明らかにした。人間関係に対する把握の仕方によって合理的選択の前提も変化することは、従来の運動研究や合理的行為者論にとっては大きな「盲点」となっていたわけである。本研究が析出した、運動参加者による人間関係の認識という観点を取り込むことによって、運動論にはまた新たな視界が開けてくるのではなかろうか。

さらに、本稿が重要と考える点として、「中断」という選択肢が離脱者にもたらされていることがある。実際に脱退した人や燃え尽きた人は、そのままでは社会運動団体にとって損失でしかない。人的資源が流失することは、運動の持続や発展を妨げるためである。しかし、離脱した人々はあくまで自身が関わった特定の運動や、自らが置かれている社会的背景によって脱退や離脱を余儀なくされただけであり、社会運動全般に対して嫌悪感や拒否感を示しているわけではない。本稿で紹介した多くの人々の語りは、むしろ社会運動の理念や思想に対しては共感的であり、運動を続けられる状況であれば、継続を選択していたと考えられる。先行研究は、参加者の存在が社会運動にとって重要な資源であると主張してきた (McCarthy and Zald 1977=1989)。本稿はそれとは逆に、社会運動に参加することそれ自体が、例えば余暇活動や家庭での生活のように、参加者自身の人生にとって一種の資源となり得ることを示唆する。

本研究は、運動内外の人間関係を一体化して捉えると、運動参加者にとって中断という選択が可能になることを示した。このことは、運動団体の資源流失を防ぐために、そして人々が運

動を続けるために重要な知見なのではないだろうか。参加者にとって中断という選択が可能であるのならば、参加者と運動団体の双方が損失を未然に防止できる。中断という選択肢を発見したことは、運動団体と参加者、双方の損失を防ぐための方途を示す。その点において、社会運動論が問うてきた「継続・発展」の議論に欠けていた部分を補完すると考えられる。¹³

注

¹ A氏インタビュー、2012年07月17日、於York, UK.

² B氏インタビュー、2012年10月16日、於東京都文京区.

³ C氏インタビュー、2012年10月15日、於東京都中央区.

⁴ D氏インタビュー、2010年8月11日、於札幌市手稲区.

⁵ D・E氏インタビュー、2010年8月11日、於札幌市手稲区.

⁶ 紙幅の関係から紹介できないが、K氏は学生運動内での「内ゲバ」により運動を止めている。

⁷ F氏インタビュー、2012年9月16日、於札幌市北区.

⁸ G・H氏インタビュー、2012年9月16日、於札幌市北区.

⁹ I氏インタビュー、2010年2月28日、於札幌市北区.

¹⁰ I氏インタビュー、2010年2月28日、於札幌市北区.

¹¹ J氏インタビュー、2010年8月10日、於札幌市北区.

¹² M氏インタビュー、2010年4月7日、於東京都新宿区。また、インタビューリストにはないが、2010年8月8日札幌市北区、2010年5月24日札幌市中央区にて、J氏の友人たちにインタビュー

を行った。彼と同じく、運動団体 X に入入りする人々である。

¹³ 最後に本研究の限界を示して、本稿を締めくくりたい。本稿の大きな限界として、事例が少数であることが挙げられる。とりわけ、社会運動を中断した人々は二人だけであり、いずれも貴重な事例ではあるものの、十分な知見を引き出すには困難な数であるとも言える。本稿の中では示されなかったものの、例えば運動を中断した人々の中には、運動内と運動外の間関係が一体化されてい

ることをネガティブに感じている者もいるだろう。人間関係が一体化しているということは、大きく道を踏み外せば、すべての人間関係を失ってしまうことと紙一重なのである。本稿では離脱を防ぐ方策として評価した「中断」も、場合によっては社会運動のみならず日常生活にも支障をきたす引き金になってしまうかもしれない。そのあたりの問題に注意しつつ、今後さらに事例数を増やして検討することにより、本稿の結論が適切であるか否か、引き続き検証していく必要があるだろう。

文献

- Activist Trauma Support, 2005, Activist Trauma Support Website (2012年7月5日取得, <https://www.activist-trauma.net/>).
- Marlash, Christina and Jackson, Susan E. 1981, "After-Effects of Job-Related Stress", *Journal of Occupational behavior*, 3(1): 63-77.
- Demerath, N.J., Marwell, G. and Aiken, M.T., 1971, *Dynamics of Idealism: White Activists in a Black Movement*, Hoboken: Jossey-Bass.
- Hirschman, A.O., 1970, *Exit, Voice, and Loyalty: Responses to Decline in Firms, Organizations, and States*, Cambridge: Harvard University Press.
- Hochschild, A., 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, California: University of California Press.
- 片桐新自, 1995, 『社会運動の中範囲理論——資源動員論の展開』東京大学出版会.
- Keniston, K., 1968, *Young Radicals: Notes on Committed Youth*, New York: HBJ College & School Division. (=1973, 庄司興吉・庄司洋子訳『ヤング・ラディカルズ』みすず書房.)
- 木村邦博, 1994, 「オルソン問題と資源動員論——社会運動の合理的選択理論と政治社会学」『理論と方法』9(1): 39-54.
- 久保真人, 2004, 『バーンアウトの心理学——燃え尽き症候群とは』サイエンス社.
- Klandermans, Bert, 1995, "The Cultural Analysis of Social Movements", Johnston, H. and Klandermans, B. eds., *Social Movements and Culture*, Minneapolis: University of Minnesota Press: 3-24.
- McAdam, D., 1982, *Political Process and the Development of Black Insurgency, 1930-1970*, Chicago: The University of Chicago Press.
- , 1988, *Freedom Summer*, Oxford: Oxford University Press.
- McAdam, D., McCarthy, J.D., and Zald, M.N., 1997, *Comparative Perspectives on Social Movements*, Cambridge: Cambridge University Press.
- McCarthy, John M. and Zald, Mayor N., 1977, "Resource Mobilization and Social Movements: A Partial Theory", *American Journal of Sociology*, 82(6): 1212-1241. (=1989, 片桐新自訳, 「社会運動の合理的理論」塩原勉編, 『資源動員

と組織戦略——運動論の新パラダイム』新曜社, 21-58.)

Oberschall, A., 1973, *Social Conflicts and Social Movements*, New Jersey: Prentice-Hall.

Olson, M., 1965, *The Logic of Collective Action: Public Goods and the Theory of Groups* (=1996, 依田博・森脇俊雅訳『集合行動論——公共財と集団理論』ミネルヴァ書房.) .

Rodgers, Kathleen, 2010, “‘Anger is Why We’re All Here’: Mobilizing and Managing Emotions in a Professional Activist Organization,” *Social Movement Studies*, 9(3):273-291.

佐藤博樹・武石恵美子, 2010, 『職場のワーク・ライフ・バランス』日経ビジネス文庫.

佐藤嘉倫, 1995, 『意図的社会変動の理論——合理的選択理論による分析』東京大学出版会.

Taylor, Verta, 1989, “Social Movement Community: The Women’s Movement in Abeyance”, *American Sociological Review*, 54(4): 761-775.

【付記】査読をお引受け頂いた山田真茂留先生、中筋直哉先生に心より感謝の意を申し上げます。本論文の基となった報告として、第85回日本社会学会大会「社会運動（ボランティア）」部会での報告、IOS-IASA 4th Joint Workshop and Asia Barometer Workshop 2013での報告があります。司会、オーガナイザーをお務め頂いた先生方、フロアの皆様に記して感謝します。

論文作成の過程では、多くの先輩・後輩にお世話になりました。最後に、取材をお許しいただいた皆様に、心よりお礼を申し上げます。なお、本研究は、独立行政法人日本学術振興会の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」による支援を得た「東京大学大学院人文社会系研究科 次世代人文社会学育成プログラム」(2009年度～2012年度)によるものです。

(とみなが きょうこ、東京大学大学院／日本学術振興会、nomikaishiyouze@gmail.com)

(査読者、中筋直哉、山田真茂留)

The Exit of Activists from Social Movement Activities: Retirement, Burnout, and Suspension

TOMINAGA, Kyoko

Previous studies have focused on activists’ participation and durability in social movement activities and not their “exit” from such activities. This case study clarifies why and how participants exit from such activities and attempts to contribute to social movement theory by revealing the negative side of social movements. In this study, “exit” was categorized into retirement, burnout, and suspension. Through an interview survey, we found that not only mental and physical stress but also interpersonal relationships influenced activists’ exit from social movement activities. The degree of overlap in interpersonal relationships between inside and outside in social movements significantly influences the retirement process.